

# 『19世紀の女性』における フラーの自己イメージの位相と声

伊藤 淑子

## はじめに

アメリカにおける自由と平等の根拠が独立宣言であることは、2013年1月20日に行われた第44代アメリカ大統領バラク・オバマの二期目の就任演説において、繰り返し「生命、自由、そして幸福の追求という侵すべからざる権利」という表現が引用されたことにも明らかである<sup>1)</sup>。しかし独立宣言に掲げられた権利は、個人の権利である前に、国としての権利であったことも看過できない。独立宣言は次のように始まる。

人間の営みのなかで、ある人民が、他の人民を結びつけてきた政治的な絆を解き、自然の法、自然の神の法が保障する独立した対等の立場を、地球上の国々にのあいだに獲得することが必要になったとき、人類の意見をきちんと尊重するためには、なぜ分離しなければならなくなったのかという原因を明白にすることが求められる<sup>2)</sup>。

独立宣言はイギリスの支配から脱し、独立した国としてのアメリカを承認することを要求するためのものであった。そこで問題になるのは「人民の権利」である。自然によって与えられた「安全と幸福」の自明の権利を、どのような為政者に委ねるかを選択する権利である。為政者との関係において、人民の権利は契約的に委譲されるものであるとされる。

アメリカは宿命的な矛盾をその歴史のはじまりから保有していたといえる。個人として幸福を追求する権利と、構成員の合意に基づいて為政者を選

ぶ権利が両立することは容易なことではない。為政者を選ぶ同意は特定の利益集団によって結ばれ、排除された者は不同意を声にすることが困難であった。権利からの排斥は多様である。黒人、新しい移民、ユダヤ人、アジア人と人種やエスニシティが権利からの排斥につながることもあれば、女性、同性愛者のように、性やジェンダーによって権利から排斥されることもある。

1776年の独立宣言から今日にいたるまで、アメリカの歴史は、個人が権利を持つことと合意により為政者に権利を託すことの矛盾によって成り立ってきたともいえるだろう。それぞれの立場からの権利の要求は、異なる立場から発せられる権利の要求に言説を与えてきた。黒人奴隷制廃止運動は女性の権利運動に、公民権運動はネイティブ・アメリカンやアジア系アメリカ人の運動と意識に、というように個別の動機から発せられた声は、たがいに影響し、周辺に追いやられた者の側からの主張が重なり合っただけでなく、潮流を起こしてきた。それでもまだ「生命、自由、幸福の追求」という権利から排除された者が存在する。だからこそ、オバマは次のように就任演説のクライマックスで述べる。

我々の旅は、妻や母や娘たちが努力に見合う生活を営めるようになるまで終わらない。同性愛の兄弟姉妹が法の下で他の人たちと平等に扱われるようになるまで終わらない。なぜなら、我々が本当に生まれながらにして平等ならば、互いへの愛も平等でなければならないからだ。

女性の権利はまだ確立されていないというオバマのことばを裏付けるのは、フェイスブックのCOOとして世界中の注目を集めるシェリル・サンドバーグが「なぜ女性のリーダーが少ないのか」と題して行ったTEDの講演であろう。男性の野心には肯定的である一方で、女性が出世を望むことを好ましくないと思わないのが社会の現実であることを事例やデータで示し、女性自身の意識にも成功は援助に恵まれていたからであると考えられる傾向があり、男性が自分の力で成功を勝ち取ったと考えるのと好対照であることをサンドバーグは説く<sup>3)</sup>。

いつも自分の能力と成果に対して遠慮がちな評価を下す傾向が、いまでも

女性にあるとするならば、アメリカの女性の権利運動の先駆けであるマーガレット・フラーはどのように自己を理解し、どのような自己イメージとを抱いていたのであろうか。本論文の目的はフラーの主著である『19世紀の女性』を中心に、フラーの女性としての自己イメージを探ることである。『19世紀の女性』は1845年に出版されている<sup>4)</sup>。その3年後にはじめての女性集会がセネカ・フォールズで開かれ、女性の権利宣言である「感情宣言」が出される。まさに女性の権利が問題になりはじめたばかりの時代であり、ということは多くの人びとは女性が権利を求めることに耳馴れていない時代であったといえる。その時代に女性の権利を論じたフラーがどのように自己自身をとらえていたのかを検証したい。

## I 『19世紀の女性』における分断されるフラーの語り

『19世紀の女性』においてフラーはまず語り手として登場する。しかしフラーはなかなか自分自身を際立たせようとはしない。「私たち」という人稱を用いることによって、一般的な人びと、読者を含めた同時代を共有する人びとの一人となり、当時の社会の状況や勢や言論の情勢にカメレオンのように溶け込もうとする。ことばを発するものとしてのフラーの存在になかなかたどりつけない。読者と同じ次元で、史実や神話、文学からの例証に驚いてみせる。

冒頭で例証される「放蕩息子」に対しても、フラーは読者と水平な位置を保つ。

放蕩息子が他人の広い畑でもみ殻を拾って生きているのを、私たちはしばしば目にする。私たちは彼に対する同情の涙を浮かべるが、しばらくして涙で重くなったまぶたを上げると、すべての善と力と美を引き出すことのできる天賦の才と愛が、彼のなかに輝かしく出現するのを目撃することになる。私たちは彼が、もっとも大きな権力を主張するための正当な基盤を備えたことを理解するのである。(7)

フラーも放蕩息子のみじめな姿を憐れむ側であり、突然の人格的な成長と変貌に驚愕を覚える側である。

複数の一人称はフラーのいわば隠れ蓑である。一般的に社会に共有される意識からひときわ抜き出た見識をもっていることを誇示し、檀上にあがって自分の意見を披露するというような態度を、語り手としてのフラーはなかなか見せようとしな。世間に存在する人びとが抱いているであろうとフラーが仮定する意識のなかに、フラー自身も埋没し、その位置から社会を観察する姿勢を保とうとする。

私たちが必要とするものを本当に言うことができたなら、その見失った子について説明することができたなら、その子は見つかるだろう。(10)

フラー自身も探しているものを名指すことができない者であるかのようにふるまって見せるのである。

しかしこれが演技であることはすぐに露呈する。求めているものを名指すことができないのは、いまだに実現しないものを求めているからであって、何を欲しているのかがわからないからではない。

あらゆる恣意的な障害が取り払われるだろう。すべての道は男と同様、女にも自由に開かれるだろう。これが実現し、一時的な軽い興奮がおさまれば、私たちは、結晶がもっと純粋で、もっと多様な美しさに富んだものであるとわかるだろう。聖なる活力は、いままでの歴史にないほど、自然に充満し、不調和な衝突はいっさい消え、うっとりするような天空の調和が実現されるだろうと私たちは信じる。(20)

求められているのは「うっとりとするような天空の調和」である。

それでもフラーは自身の意識を「私たち」という不特定の混乱した者たちのなかに隠し、どのようにすれば「男と同じ精神的、肉体的自由が、女に対しても、特別な配慮としてではなく、権利として認められる」ようになるのか、「男が本当に女と対等な敬意で結ばれる」ようになるのか、女も「人間

性をもつ者として成長し、知性として識別し、魂として自由に、邪魔されることなく生きる」(20) ことができるようになるのか、ミランダという友人を登場させて語らせる。ミランダはきわめて明晰な自己認識を備え、自分の考えを述べることにためらうことはない。

ミランダは「自分の性の立場について、過激さも辛辣さも帯びずに語ることのできる」女性として紹介される。熱情にかられるのではなく、冷静にものごとを観察することができることが最初にくる。そしてミランダと父親の関係が述べられる。

彼女の父親は、女に対して感傷的な敬意はいっさい抱かなかったが、両性の平等に関しては確固とした信念をもつ男であった。彼女は一番年長の子どもであり、父親が話し相手が必要とする時期に生まれた。彼女が話したり一人で行動できるようになると、彼は、愛玩すべき存在としてではなく、生きた精神をもつ存在として彼女に話しかけた。(21)

ミランダの父親は娘の頭脳を「永遠の知性の殿堂」(21) として敬愛する。

聡明な頭脳によって父親から愛され、幼少時から高度な教育を受けたのは、フラーにほかならない。友人として登場するミランダがフラー自身のペルソナであることは疑いようのないことである。ミランダの精神的な成長の軌跡がつづられるが、それはフラーが自分自身の出自をどのようにとらえていたかということを示すものである。「精神の子ども」と自分をとらえ、「独立独行の感覚」を身につけたのはフラーである。

興味深いのは、ミランダの外見的な魅力が否定されていることだ。

彼女は幸運にも、困惑するようなお世辞を引き出す魅力はまったくなかった。電氣的ともいえる性質で、自分になじまない人は寄せつけず、ふさわしい人を引きつけた。男とも女とも、気高く、愛情のこもった、知的な関係を結び、情熱も冷淡さも無縁であった。彼女にとって世界は自由であり、彼女はそのなかで自由に生きた。(21)

ミランダはフラーを投影する人物であるが、ミランダについて語られた外見的な魅力の欠落が、フラーにそのままあてはまるのかどうかを確かめることはできない。フラーが生きた時代は写真の普及する前である。一枚の銀板写真が残っているだけであり、フラーの外見について、美醜を論じることは主観的な判断に基づくものにならざるをえないとしても、そもそも議論をするための根拠となるものが存在しないのである。フラーは美しい女性ではなかったとされることが多いが、それは外見を評価してのことではなくて、『19世紀の女性』や日記、手紙において、フラー自身が自分に魅力が欠落していたと述べていることにもよるものであろう。

つまりフラーはミランダの造形にもあるように、自分に美しさを読まれることを嫌っていたということではないだろうか。女性として異性に対する魅力をもってしまったら、頭脳の力、精神としての存在を失い、とたんに身体性の記号をまとわされてしまうことをフラーは恐れていたといえるだろう。

男たちは、彼女の精神と生き方を理解し、兄弟に対するような信頼、姉妹に対するような優しさ寄せた。洗練された男たちだけではなく、かなり粗野な男たちでさえ、計画の決意と明快さがわかれば、その計画者を認め、援助する。(21)

ミランダの精神性を理解した者がミランダの援助者になるように、フラーも身体の魅力を読む前に、精神における共感の絆を求めたといえる。

## II ミランダという名前の逆説

ミランダは自分の知性が父親によって鍛えられ、父親との関係性が人格の基盤になったことを幸運であったと述べる。

私が幸運だったことは認めなければならないけれども、それが理想的ともいえない。幼いときに優しい父の信頼を得たことは、私に最初の「先

入観」を与え、そのあとのことは当然の結果として起こった。たしかに私は、のちに多くの女ほど外部的な援助を得られなかったけれども、それはたいして重要なことではない。私の魂のなかで、早い時期に信仰が目覚めている。信仰とは、魂が求めることができるものは獲得しなければならないし、他の人たちに助けられ導かれることもあるけれども、唯一不変の友人として自分自身を頼りにしなければならないという感覚のこと。(22)

自分自身を信じる信仰とは超絶主義の自己信頼のことであり、ここでミランダの父親は、フラーの父ティモシーと、フラーを超絶クラブの機関紙『ダイヤル』の編集者として迎えたエマソンへという二つの面をもつことになる。

しかし娘の頭脳を認める父をもつことと、エマソンという時代のカリスマをメンターにもつことが、一般的に女性に期待されているものとかけ離れた特性をフラーに与えたことを、ミランダが代弁する。

この独立心は、私にあっては榮譽であるのに、大部分の女のなかでは短所として非難される。女たちは自分の規則を、内側から発展させるのではなく外側から学ぶように教えられる。(22)

精神性を女性が得るということは、欠陥のある者として扱われることを引き受けることでもあったのである。

ミランダは男性から支配的な態度を受けたことがないと語るが、「女たちは、女にとって思考や性質における独創性ほど恐ろしいものはないと考える後見人たちの教訓を詰め込まれている」(22)と指摘し、そのまま語りの場から姿を消す。そしてそのあと『19世紀の女性』にミランダが登場することはない。ミランダは幸運な娘として自己の身体に対する精神の優先することを体得することができたが、それは奇跡的なことでもある。

ミランダの幸運な奇跡はフラーのものであり、ミランダが提示する女性像はフラーの自己イメージであることはまちがいない。フラーが『19世紀の女性』で繰り返し主張するのも、女性の精神が高められることである。

それではなぜ自分自身の姿としてではなく、精神の優先を獲得した女性をミランダとして登場させるのであろうか。その答えはミランダという名前に暗示されているのではないだろうか。

『19世紀の女性』の冒頭で『ハムレット』の「弱者、汝の名は女なり」というセリフを引用し、また夫婦像を例示するためにブルータスとポーシャを取り上げ、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』に描かれた二人の会話を引用していることからわかるように、ミランダという名前をフラーが選んだ背景に『テンペスト』があることはたしかである。『テンペスト』において父によって育てられた娘ミランダの名前を、同じく父によって精神を鍛錬されたミランダにフラーは与えたのである。

しかしここで確認しておきたいのは、『テンペスト』のミランダの父プロスペロが、娘に対してはかなり身勝手な家父長的な支配者であることである。弟の企みによって公国の王の地位を奪われ、孤島で生き残った娘と暮らすプロスペロは、魔法を身につけ、ひそかに復讐をねらっている。しかしプロスペロ自身が魔法を引き起こすことはなく、魔法の力の実行は島の妖精が担う。妖精は中性的に描かれ、支配的で命令的なプロスペロに男性性を読むならば、性の二分法によって必然的に女性性を帯びることになる。そしてプロスペロの支配的な姿勢は娘ミランダにも発揮される。幼い時から父しか保護者をもたなかったミランダにとってプロスペロは絶対的な存在であるが、娘からの信頼はプロスペロには当然のことであり、自分の復讐計画のために、プロスペロはミランダの結婚相手を決める。結果的にはプロスペロは自身の思いを晴らし、ミランダも幸福な結婚を手に入れるのであるが、そこに描かれているのは娘の意思を無視する横暴な父親である。

ミランダという名前が示すのは、父によって娘の精神性が形成されることへのアイロニーであろう。父とは育成者と同時に支配者である。父は娘に自尊の感情を植えつけるかもしれないが、娘は父の支配から逃れることもできない。父を否定することは自身の知性と精神を否定することであり、それは自尊の根底を失うことを意味する。

フラーは自分の分身としてミランダを登場させ、ミランダという名前によって自身の自己イメージの逆説を示す。高められた精神を誇り高く思うと



同時に、完全な知性の独立が夢想する理想にとどまっていることを、精神の限界であると述べることなく示す方法が、ミランダという名前である。他からの影響のいっさいを排除され、プロスペロによってのみ教育されたミランダは豊かな感性と知性を備えているという点では、フラーの求める純粋な精神をもっている。しかしそれはまだミランダのものであるとはいえ、父であるプロスペロに所持され管理されたままである。それはフラーの心情を映しだしているといえるだろう。自身の精神性と知性を肯定しながら、完全な精神の独立を確信できないフラーがミランダという名前によって現れる。

### Ⅲ 二つに分化する自己イメージ

ミランダが消えたあと、独立した精神として主張する声は語り手自身が担わなければならない。しだいに「私たち」という複数の一人称の曖昧性が薄れ、明確な「私」が表出される。女たちに呼びかけ、女たちに意識の改革を迫る「私」へと変わっていく。自由をもたず、長く抑圧を受けてきた女性に自由が使いこなせるか、という問いに対する答えは明確である。

私の答えはこうである。まず、自由は突然もたらされるものではないだろう。女の財産権の拡大の問題に関する今年の議論を昨日読んだところである。必要となる教育を準備する教科書になかの一頁であった。男たちは声を上げながら、明白に学び取った。女の権利の擁護者たちは、逆の視点から議論の誤りを理解した。そして自分たち自身の確信にはっきりしたのである。家にいる彼らの妻も、そしてその頁の読者も同様である。そして流れができる。思想は行動を促し、行動はさらにより思想を生み出す。(101)

そしていったん流れができたなら、女性はどうのような職業に就くこともできるし、限定されない力を発揮することができるかと断言する。

力強く「私」は呼びかける。

私は女に、まず神のために生きることを望む。女は不完全な男を自分の神にして、偶像崇拜に陥ってはならない。女は弱さや貧しさを感じて自分に合わないことを引き受けてはならない。自分の必要とするものが男に備わっていると思ってこそ、女は愛する方法を知るのであり、愛される価値のある者になれるのである。

より魂の存在であることによって、女が女らしさを失うということはない。なぜなら自然は精神を通して完成するからだ。(103)

男性の庇護を受ける者としてではなく、自立した精神をもつ者として女性が生きることこそが自然の摂理に適うことである。

フラーは語り手「私」にさらにラディカルに発言させる。

男女に違いはない。私たちのなかで声を上げ、りんごがりんごであるように、女は女であり、それぞれの存在がそれぞれに適う完全を要求するのは、女であることではない。権利の法則、成長の法則が声を上げ、完全を求めているのである。女の権利の主張という理論を用いるのではなく、娘として生まれた私が、男（マン）の、つまり人間の人生を生きていることを私は知っている。(104)

「娘として生まれ」父によって教育された「私」の独立宣言であるといえるだろう。ミランダのペルソナはもはや必要ではない。きっぱりと男女を超越する「マン」として存在する「私」が提示される。

しかし、ここで注目しなければならないのは、フラーが断定的に発言する声をもつ「私」を確立するとき、もう一つの自己イメージを示していることである。40歳の平凡な女、若さのもたらす美や優美さを失った40歳の女性がもちだされる。

あの心労でやつれた顔を見てみよう。柔らかな輪郭もしみで汚れている。色あせた瞳を見てみよう。孤独な涙が、夢見るような目の輝き、優しい情熱が放つ穏やかな白い光を流し去ってしまった。この女は茶会に出る

ように着飾ってはいない。それでも絵にはなる。男と同様に、40年の歳月を過ごした結果としての人間らしい外見を備えている。(59)

歳月は風貌をやつれさせても、人生の経験は豊かな人間性につながっている。

『19世紀の女性』を執筆したフラーはまだ40歳という年齢には達していないが、女性にとって年齢を重ねることが若さという資産を失うことではなく、人生経験の厚みという新たな、より有益な力を得ることであることを説く。そのような位置にいる者として、自分自身を描き出すことによって、フラーは信念をもって読者に語りかける一人称の語り手「私」になるのである。

## おわりに

フラーは『19世紀の女性』において、四段階の自己イメージを提示する。まず「私たち」という複数人称に隠れて、控えめに疑問を提示してみせる偽装的な自己イメージを示す。そして語りの外側からミランダという友人を登場させ、ペルソナを形成する。ミランダをフェードアウトさせると、語りの声は「私」が引き受けるようになる。その「私」を支えるかのように提示されるのが、40歳の平凡な、しかし人生経験を積んで豊かな人間性をもつ女性の像である。そして、最終的に「私」は確信をもって社会が変わるために女性の意識の改革が必要だと訴える声を獲得する。

このように複雑な自己イメージと声をもつのが『19世紀の女性』である。シンフォニーが四つのムーヴメントによって構成されるように、フラーの声はそれぞれの局面でトーンを変え、やがて大きく響きあうように構成されている。近年出された二つの評伝があるが、マットソンは父親からの教育をフラーが喜んで応じたこと、あるいは兄弟が生まれるたびに忙しくなる母親に代わって、フラーにとっては愛情を感じることでできる機会であったことを強調する(17-19)。一方、マーシャルは早くからフラーが父親からの影響を脱し、自分自身のロールモデルを求めたことを日記や手紙からたどろうとする(19)。父への依存と父からの独立はフラーの精神の自立における葛藤

であったことを示すのが『19世紀の女性』において変容する自己のイメージと声である。

『19世紀の女性』におけるフルーの自己イメージの位相と声

## 註

- 1) 演説内容はホワイトハウスの公式サイトを参照。<<http://www.whitehouse.gov/the-press-office/2013/01/21/inaugural-address-president-barack-obama>> 2013/11/04. 日本語翻訳にあたって「日本経済新聞社：「我々の旅は終わらない」オバマ大統領就任演説全文」を参考にした。
- 2) 独立宣言は「USHistory.org」を参照。<<http://www.ushistory.org/declaration/document/>> 2013/11/04. 日本語訳は拙訳。
- 3) 「TED：シェリル・サンドバーグ」<[http://www.ted.com/talks/lang/ja/sheryl\\_sandberg\\_why\\_we\\_have\\_too\\_few\\_women\\_leaders.html](http://www.ted.com/talks/lang/ja/sheryl_sandberg_why_we_have_too_few_women_leaders.html)> 2013/11/04.
- 4) 『19世紀の女性』はノートン版を用いる。このテキストからの引用の日本語訳はすべて拙訳。頁は（ ）を付して本文中に記す。

## 引用文献

- Fuller, Margaret. *Woman in the Nineteenth Century*. Ed. Larry J. Reynolds. New York: Norton, 1998.
- Marshall, Megan. *Margaret Fuller: A New American Life*. Boston: Houghton Mifflin Harcourt, 2013.
- Matteson, John. *The Lives of Margaret Fuller*. New York: Norton, 2012.
- Shakespeare, William. *The Tempest*. Oxford: Oxford UP, 2008.